総合科目「大学史」がスタート

創立記念日〔9月16日〕特集

時代背景とともに学ぶ

2009年に創立130年を迎える専修大学。その歴史や建学の理念、創立者や後継者、卒業生の活躍などを当時の時代背景とともに学ぶ総合科目「日本の大学史のなかの専修大学」が前期授業で行われた。大学史を授業の中で組織的に展開するのは本学にとって初の試みで、来年度以降も継続される。専門別に学内外の11教員が担当し、「建学の精神と大学の未来」では日高義博学長が講義を行った。授業を開設した狙い、学生や担当した教員の反応などを、専修大学130年史編集主幹の青木美智男元文学部教授に寄稿していただいた。

「日本の大学史のなかの専修大学」

専修大学ってどんな大学？　なんとなく受験して合格し、入学式で学長からアメリカ帰りの4人の創立者たちの壮烈なドラマを聞いて、なんとなく古そうな大学だという印象を持った程度で、4年後には卒業式を迎える。これでいいのだろうか――。

こんなことを『専修大学130年史』の編集を頼まれた時に、日高義博学長や富山尚徳専務理事と話し合った。そこで教養の歴史学を担当されている大谷正法学部教授にお願いし、本年度から教養科目の総合講座で専修大学の歴史を開講することになったのである。

しかしシラバスを作成するに当たって、どなたに講義をお願いしたらよいのか見当もつかなかった。なぜなら本学がこれまで出版した大著『専修大学百年史』上・下巻などには歴史学を専門とする専任教員は関係してこなかったからである。

大谷教授は、なんとか専門に近い時代や分野を研究されている専任教員の方々に声をかけて反応をうかがった。そこで、ほとんどの先生方からあっさり拒絶されるのではないかと思ったそうである。

▲　学生に語りかけるように講義した日高学長

近代史に大きな足跡

創立者後継者　著名な人物ばかり

ところがお願いにあがった専任の教員の方々の多くから、意外にも快く承諾をいただいた。理由は二つある。

一つは高木侃法学部教授のように、日本の近代法学を考えるとき、専修大学法学部の歴史を抜きには語れないと、すでに毎年講義されていて、大学がそうした講義を開設するのを待ちに待っていた方々が存在したこと。

もう一つは、創立者や後継者たちが、それぞれの専門分野において研究対象となるほど著名な人物たちばかりで、彼らを抜きにして日本近代の歴史は語れないほどの存在だったからである。その点で日本法制史や日本経済史を担当する先生方にとっては、なじみの人物たちであり、大学だったのである。だから「講義はすごく面白くなるぞ」という実感を持った。

情熱的な講義で受講生を魅了

こうして4月から講義は始まった。木曜日の4・5時限連続だったので受講生が集まるか心配だったが、110人前後の履修届が出た。驚きは、1年次生ではなく、2、3、4年次生がかなりの割合を占めたことである。初めの頃の講義の感想に、4年次生が就職活動に当たって専大のことをもっとよく知っておくべきだったと書いているのを読み、受講生にかなりのインパクトを与えることができると思った。

講義は江戸時代末期の教育状況から2000年代の専修大学の発展まで、専大の歴史にとって重要なテーマを選び、ほぼ専任の教員で担当したが、いくつかは他大学の教員に頼んだ。また卒業生の動向については、卒業生の方々から直接講義していただいた。

講義で特に印象に残ったのは、創立者への思いとそれをベースにした「社会知性の開発」をめざすこれからの専修大学像に迫った日高学長の講義。高木教授の日本近代社会の形成と専修学校の法学科の果たした役割。永江雅和経済学部教授が担当した「ミスター大蔵省」と呼ばれた創立者・田尻稲次郎の財政政策とその学問の特色。桜井良樹・麗澤大学教授による2代目学長の阪谷芳郎の財政学と政治活動。「15年戦争」への専修大学のかかわりを、映像を交え熱っぽく語った新井勝紘文学部教授の情熱。そして戦後の大学再建に大きな役割を果たした学生・卒業生、なかでも今村力三郎の偉大さを説いた大谷教授と石村修法科大学院教授の講義である。

それぞれの先生方は初回ということもあって、すごく綿密な調査の上に持論を展開された。それが受講生には新鮮な知識となった。専大の歴史を学ぶだけでなく、高校で学んだ近代の政治や経済の知識の上に、それを支えてきたのはこんな人物たちだったのかということと、そういう人物が教壇に立って学生たちを育成してきたのが専大だったということが理解できたことと思う。

ただ、創立者の業績や政治や社会との関係は明らかになったが、教育を通してその思想や知識が学生にどう伝達され、卒業後に血となり肉となって社会活動に影響したのかという点にまでは至っていなかったと思う。宮岡孝之法科大学院教授を中心とした卒業生の皆さんからいただいたメッセージも、その辺の事情がまだ不透明だった。

来年度以降も精力的に

社会をリードする卒業生輩出の時期

専大の現在に至る道筋もかなり明らかになった。専修学校から専修大学へ成長する過程の歴史には、あらゆる青年に教育の機会を与え、しかも少人数教育による法学・経済学の専門的知識を身につけた人材養成という、創立者たちの理念が一貫して流れていた。それは経済・法律学の研究・教育を通して、即戦力となる実務家の養成に尽力してきたことを物語る。

教員はほとんど無給で、別に本職を持っていた。そのため財政基盤はぜい弱で、震災や戦災の復興資金は寄付金と募金でまかない、研究・教育を維持してきた。戦後の新制大学昇格以降も困難をともなった。こうした困難を、身をもって体験し、大学を支えてきたのが専大卒の職員たちだった。

そして、文学部、ネットワーク情報学部など現在の在学生2万人に及ぶ総合大学への道は、卒業生である川島正次郎、森口忠造両理事長たちの手によって、その基盤が形成された。それは日本の高度経済成長政策が求める人材育成をめざすことで飛躍が可能になった。だからバブルの崩壊は、専大の存在を大きく揺るがすことになったのである。

現在、それは「社会知性の開発」を21世紀ビジョンに据える本学の教学と経営の一体的運営体制の構築によって克服されようとしている。

本学の卒業生数は、130年の歴史を持つにしては25万人強に過ぎず、卒業生のほとんどは、高度経済成長期以降の方々で占められている。このことは、日本社会をリードする卒業生が続々輩出する時期がまもなくやってくることを意味する。そこに新たな飛躍が期待できるだろう。

（青木美智男）

130年に向けて

年史や大学史紀要

創立者出身地で展示も

大学史資料課では専修大学創立130年に向け、年史の編集などさまざまな活動を予定しています。（大学史資料課）

◆専修大学130年史の編集

第一にあげられるのは、130年史の刊行です。特徴の一つとして、これまでの写真など図版を多く取り入れたビジュアル中心の年史ではなく、「読んでもらう」ことを目的とした年史にそのスタイルを切り替えたことがあげられます。これは来年度以降も開講される専修大学史の授業のテキストとして使用するためでもあります。

また、130年史はこれまでのように在学生や育友や校友、教職員などの本学関係者に配布するだけでなく、一般の書店でも販売する予定です。創立130年という伝統ある専修大学の歴史を、広く多くの人々に知っていただけるような親しみやすい本にしたいと考えております。

◆『大学史紀要』の刊行

大学史資料課が所蔵している資料は内容も種類も多岐にわたります。これらの資料をどのように収集・保存・活用していくのかという問題は近年、全国の大学が共通して抱えている問題です。大学史資料のより良い収集・保存・活用を行うためには、本学の取り組みを多くの人々に知っていただくと同時に批判していただくことも必要です。『大学史紀要』は、本学の研究・教育活動のほか、大学史資料課の活動や新資料の紹介を行う場であるとともに、他の大学や文書館、博物館などの資料保存機関との情報交換の場ともなり得るのです。

◆創立者地方展の開催

これまで、創立者や専修大学の歴史に関する大規模な展示は創立100年や120年などの節目の年に、学内および都内の会場において行われてきました。大学史資料課では、今後、地域の博物館や図書館、さらには他大学とも連携しながら、創立者たちの出身地において、創立者および専修大学展を開催したいと考えています。創立者4人はそれぞれ彦根や桑名、東京、鹿児島の武士の家に生まれ、留学先のアメリカで意気投合し、帰国後、専修学校を創立しました。彼らの功績や専修大学への軌跡を創立者の地元の人々に知ってもらうことにより、専修大学の存在を示していきたいと思っています。

◆「創立150年」に向けて

大学史資料課は、150年という大きな節目に向けてはやくも動き始めています。その計画の一つが資料集の刊行です。創立者や校友、戦争、学生運動というようにテーマを定め、2年に1冊のペースで刊行することによって、多くの人々に気軽に専修大学に関する資料を活用できるようにしたいと考えています。現在は情報公開の時代でもあります。本学が所蔵する資料を刊行していくことは専修大学が開かれた大学であることを内外にアピールするとともに近年、注目されている大学史研究に対しても寄与できると考えています。